地域課題「8050問題」について当委員会で話し合ったこと

１．本人が「18歳になる前」の主な問題点・課題など	２．本人が「18歳になった後」の主な問題点・課題など
・子ども時代に発達の遅れや知的な障がいが疑われる子どもがいても、支援する機関が変わるタイミングでその情報が失われやすい（幼稚園・保育園→小学校→中学校→高等学校）	・就職して実家から離れた時に、社会のペースについていけなくなる。
・自分の子どもに障がいがあるということを親や親族が隠したい、受け入れられない。支援者や関係機関も、親や親族が関わりを拒んだ場合はなかなか介入できない。	・小中学校で何か問題が見られたとしても、普通高校に入って卒業すると「普通」の能力があるとみなされ、本当は必要なはずの配慮が得られない。
・小さな人間関係の中だと、周囲が色々と手を貸すことで、本人の「できない部分」が見過ごされてしまう。周囲や本人も気づかないまま大人になってしまう。	・地元から離れて就職した場合、社会に適応できずに実家に戻り、そのままひきこもってしまうことがある。
・実際に不登校になっていても、本人は安心できる環境にいると感じていることもある。「将来のために周囲が心配すること」と、「本人の意思・希望」がかみ合わないことがある。	・今30代くらいまでの人だと、過去に関係機関の関わりがあれば情報があるが、40代、50代以上は関係機関にも情報がなく、どんな人かが分からない。
	・自分の子どもに障がいがあるということを親や親族が隠したい、受け入れられない。支援者や関係機関も、親や親族が関わりを拒んだ場合はなかなか介入できない。
	・「8050問題」と言われるように、一般に問題視されるのは親や本人が高齢化してからだが、そこに至る前の時期でも根は同じ問題である。

地域課題「8050問題」について当委員会で話し合ったこと

３．支援者や関係機関はどのように支援をしていくべきか？

【未成年期】

・町によっては、支援級や特別支援学校を活用した児童については関係者が集まり情報交換をする「連携協議会」がある。その協議会内で、学校が切り変わるタイミングでの情報共有や引き継ぎが行われるような取組ができれば良いのではないか。

・成年してから障がいが発覚したり、支援を受けることについては、本人、家族とも心理的なハードルが高くなる。早い時期で支援者につながることができれば、その後に支援を受けることへの拒否感が軽減されるため、課題がある子については早期発見をして支援につなげるのが望ましい。

【成年期】

・就職等で地元を離れたケースが、何かの問題で地元に戻ってきた後に引きこもるケースがある。本人の同意等の課題はあるが、支援の必要性や気になる要素がある子については、文書にまとめたものを就職先に預け、何かあったら関係機関に連絡してもらえるような取組ができれば良いのではないか。

【未成年・成年期を問わず】

・本人だけでなく、同居している親の意向が大きく働くことが多い。「まだ自分たちが面倒を見るから大丈夫」や、「うちの子は健常だから大丈夫」等。時間を経て親が高齢化した際に問題と認識していくことになるため、その時点での親の認識を把握した上で、本人への支援の必要性について意識を変えてもらうような働きかけが必要と思われる。

・親を含めた本人サイドが、自分への支援の必要性をどう捉えているかを支援者が見極める必要がある。積極的な介入をしても本人たちのニーズ感がなく支援につながらない時は、見守りと状況把握を継続し、情報が途切れないよう関わっていくのが良いと思われる。

・「8050問題」の何が問題か突き詰めると、本人の社会性の喪失が、いずれ死につながるものになるということとなる。それを地域の方に知ってもらう、そういう意識づくりをする機会が作れたら良いのではないか。

・地域において、「障がい」というものについての偏見や忌避感がこの問題の一つの要因になっていると思われる。時間がかかっても、障がいに関する啓蒙活動を行い、地域での障がい者への認知や受け止め方を変えていくことで、本人や関係者が必要な支援につながる地域づくりができるのではないか。